

# 研究所での学びについて語り合う

佐々木悠介  
大原 央之

佐々木直人  
竹内 均

土屋眞貴子  
佐久間 拓

## 1 テーマ研究会<sup>※</sup>から学んだこと

※各自のテーマについて、所長・特任所員・所員とともに研究する会

**大原：**研究所に来て、子どもの学びや自分の姿がどうであったのか、今までの実践や子どもとのかかわりを、ビデオや授業記録、学習カードをもとに振り返り、レポートにまとめてきました。そして、テーマ研究会では、まとめたレポートについて、佐伯所長や特任所員、所員、研修員の皆で、それぞれの見方から意見を出し合い、子どもの学びや自分の教師としてのあり方を見つめています。

**佐々木(直)：**僕は子どもとの関係づくりが気になっていました。当時子どもはどんな思いだったのか、子どもの言葉の裏にあるものは何かと考えました。しかし自分の立場から離れられませんでした。特任所員の高柳先生に「そう見てしまう先生の裏にはなにがあるのか」と言われ考えさせられました。

**土屋：**私は覚えやすい、わかりやすい授業を大切にしていたのですが、テーマ研究会で佐伯所長から「安易な暗記法などは、オブラートのように難しいことを包み込む教育道具になっていて、それに抵抗する方向に意識を向けてほしい」と指摘されてハッとしました。それが、私の授業を見つめ直すきっかけになりました。

**佐久間：**僕も佐伯所長からの言葉で、子どもの学びを振り返るときの視点が変わったように思います。研究所に入所した頃、僕は論理的な思考力をつけるための数学の授業について考えていました。佐伯所長からは毎回のよう「数学は論理がすべてではない」と言われていました。本当にそうかと振り返ると、確かに子どもは、定義や公理にあてはめて追究するだけでなく、問題を「具体」と結び付けて自分なりにわかろうとしていました。論理や客観的な正しさを押し付けるのではなく、その子どもなりのわかり方を大切にしたいと思うようになりました。

**竹内：**私は国語の授業を振り返る中で、自分の教材観・授業観が変わっていくのを実感しました。私は指導用教科書や指導書に頼り授業をしていました。テーマ研究会で、子どもはそれらをもとにした私のとらえに納得していなかったのではないかと思います、もう一度振り返りました。自分を問い直すうえで、私自身ももっと教材に向き合わなければならないことに気がきました。

**佐々木(悠)：**これまでを振り返ると、子どもに任せられない自分がいました。ある子が、総合的な学習の時間で、本の帯づくりを熱心に取り組んでいたのですが、私は「見る人のことを考えてほしい」という自分の思いにその子を寄せてしまっていました。子どもは、それぞれ思いをもって懸命に取り組んでいることがわかり、「本当にそれでいいのか」と自分を問い続けるのが大事だと身に沁みました。

**佐久間：**悠介先生のレポートを読んだとき、正直僕は「見る人のことを考えてほしい」もやっぱり大事だと思っていました。研修員同士で討議を深めていくと、それぞれの考えに納得できて、結局何が正しいのか結論は出ないのですが、僕の考えの幅は広がりました。結果的に、色々な子どもの思いを受け入れられるようになった気がします。

**大原：**私も研修員の仲間同士で学び合うことが、自分の姿をみつめるきっかけになったと思います。中学校での縦割り活動をレポートにまとめ発表した時、研修員の仲間から「自分の中にあるモノサシで学年毎の目指す姿を決め出し、『学年という枠』で子どもを見ていたのではないかと意見をいただきました。その時、一人一人の子どもの思いに目を向けていない自分に気づき、ハッとしたことを今でも覚えています。学年という枠や子どもを集団で考えるのではなく、もっと一人一人の子どもの思いや願いに目を向けていくことの大切さを教えていただいたように思います。

**佐々木(直)：**実習で学



んだことも多かったです。僕は子どもの言動を素直に感じたいと思い、小学校の登校支援の教室に行きました。僕が子どもの話を聞き、子どもとのやりとりを楽しめたのは、研究所での振り返りがあったからだと思いました。1ヶ月の実習で子どもの言葉の裏にある思いを十分にはとらえられませんでした。テーマ研究会で意見をもらう中で、子どもが将来に不安を抱えていたり、学校で勉強しなければいけないと悩んでいたりしていることを感じました。

**佐々木(悠)：**私は、子どもの思いに寄り添いたいと考え、実習に臨みました。実習校では、ある子が、友だちとの関係をつくれずにいました。私はその子にどんな声かけや手立てがあるかと考えていました。振り返ると、私は結局自分の視点で考えているだけではないかと思いました。もっとその子の視点になり、一緒に悩んだり、取り組んだりすることが、支えになるのではないかと、それが寄り添うことなのかもしれないと感じました。

**土屋：**私は国語におけるICT活用について学んでいるのですが、ここに来る前は、ICTのことをITCって言うくらい何もできなかったんですよ(笑)そんな私でも、長野市立長野中学校での参観や授業実践、信州大学でICTの実際を学ぶことを通して、実習では、テーマである「対話が生まれ、学びの深まるICT活用」に近づくような授業ができるようになってきたと感じました。ICTを活用することで、主体的に学ぶ生徒を目の当たりにして、気付けば生徒と一緒に授業を楽しんでいました。

**竹内：**土屋先生がICTを活用する授業について学んでいることで、私たちもICTの活用について学ぶ機会をいただきました。県内の先進校に視察に行かせていただくと、思考ツールを活用して追究したり友の考えを知ったりと、タブレットでより深い学びをしていたこと、また、課題に対して一人一人が集中して活動していたことに驚きました。



## 2 様々な先生方から学ぶ講義

**土屋：**研究所では、講義を受ける機会が多くありました。所長講義は佐伯所長が指定した本を読んで、それについてのレポートを書いて、そこから佐伯所長と話をする形でした。

**大原：**佐伯所長の著書を読んだり、直接話を伺ったりする中で、子どもへの見方が大きく変わりました。今までは自分と子どもを切り離して傍観者の的に見ていました。しかし、佐伯所長から「子どもを自分と切り離さ



ず、情感をもって感じ、子どもの訴えや呼びかけに「二人称的なかわり」や見方の大切さを教えていただきました。その見方で、今まで出会った子どもとの関係を見つめてみると、その子が訴えようとしていたことが見えてくるんですよ。そこで、子どもの本当の思いに気付けなかった自分に気付くことができました。

**佐々木(悠)：**佐伯所長と直接一対一で話をさせていただいたから、各自の課題に沿って学べたと思います。以前の私は「できる・できない」という自己有能感でなく、「それぞれによさがあるんだ」という自己肯定感を、子どもも自分も味わっていただけらなあと感じていました。しかし所長や特任所員の先生と直接話す中で「その子の視点になりきっていると、そもそもそこには自己有能感とか自己肯定感という見方は存在しない」と気付かされました。そういう視点で子どもの思いに迫ると、自分が作った評価的な視点ではなく、その子が直面していることを一緒に感じたり、考えたりできるのかもしれないと思いました。

**土屋：**佐伯所長だけではなく、松木先生、岩川先生、奈須先生、武田会長からも講義をしていただきましたね。

**竹内：**松木先生の講義では、「障がいは、人と人との間にある」というお話をいただきました。今まで障がいは、その人個人の中にあるという考えがどうしてもぬぐい切れなかったんですけど、自分の考えを改めることができました。

**土屋：**佐伯所長だけではなく、松木先生、岩川先生、奈須先生、武田会長からも講義をしていただきましたね。

**竹内：**松木先生の講義では、「障がいは、人と人との間にある」というお話をいただきました。今まで障がいは、その人個人の中にあるという考えがどうしてもぬぐい切れなかったんですけど、自分の考えを改めることができました。

**佐久間：**岩川先生の講義では、「○○力」の話が印象的でした。例えば、コミュニケーション力。「コミュニケーションは相手との間に起こるものなのに、今は個人の力の問題にしてしまう」と言われてハッとした覚えがあります。僕は、何でも「○○力」と言って、その力をつけるのが教師の役割だと思っていました。



**土屋：**岩川先生からは、子ども観、教師観の原点を教えてくださいました。中でも「並び見の分かち合い」という言葉はずっと心に残っています。教師が子どもと同じ視点に立ち、子どもに重心をおき、気持ちを分かち合う。この言葉を体現しようと思い、実習に臨みました。岩川先生に実習の様子をお伝えする会で、子どもとともに授業をしたことが楽しくて仕方がなかった



様子をお話すると、岩川先生が「教師のからだになっっている」とおっしゃってくださいました。少し理想に近づけたと、嬉しかったです。

**佐々木 (直)**：奈須先生には、講義だけでなく、指導に入られている学校に随行研修をさせていただきました。奈須先生と一緒に全学年の授業を参観しました。その時奈須先生が、子どもから少し離れて見ていたんです。理由を伺うと、奈須先生は「一人の子に寄っていくと、何でもよく見えてしまう。授業が教科の本質に迫っているかを見ていけないといけない」と教えてくださいました。

**大原**：一人の学びを見て、教師としての自分の姿を見つめることも大事なんですけど、その教科としての学びはどうであったのかも合わせて考えていけないってことですね。

**竹内**：武田会長からは、明治期からの信州教育を支えた先人たちの話を聞きました。信州教育の原点を知り、子どもを中心とした教育をこれからも大事にしつつ、よりよくしようと考えていける教育者でありたいと感じました。

### ③ これからについて

**佐々木 (悠)**：今までの振り返りでも、実習でも、私は、自分の視点で考えて、子どもを評価的にみていました。実習で出会った子から学んだのは、そうしたとらわれから抜け出す大切さです。その子の思いを見つめ、一緒に取り組む中で、初めて「寄り添い」ができてくるのかもしれないと感じました。まだまだ子どもの思いに迫れないし、色々なとらわれに悩む日々です。これからも、振り返りを大切にしながら、子どもと共に歩みたいです。



**大原**：私は過去の実践を振り返るだけではなく、早い時期から県内の中山間地域の小規模校で何度か実習を行いました。その時、対象に対しての思いや願いを異年

齢の子ども同士が分かち合いながら、学年や年齢を超えてつながり合う姿を目の当たりにしました。だからこそ、学年という枠や、自分のモノサシで子どもを見ていくのではなく、一人一人の思いや願いを感じ取りながら、子ども同士のかかわりをみていくことを大切にしたいと思います。

**佐々木 (直)**：僕は、実習で学級や教科の担任と違う立場を経験しました。今後、この経験を生かして、子どもの声を聞き、関係をつくり、子どもの思いに迫っていききたいです。

**竹内**：私は教材研究を丁寧に行って私自身の教材へのとらえをもち、そのうえで子ども一人一人の考えを受け入れながら授業を進めようと実習に臨みました。実習中は授業後には必ず、「自分の授業はどうだったのか」が浮かんできました。考えているうちに気になることが出てきて、もう一度子どもと考えたいと思えたことがあって、それは今までの私にはなかったことでした。少しずつ私を変容しているように感じています。来年度からは学校現場に戻りますが、子どもと教材を味わいながら一緒に考える授業をしていきたいです。

**佐久間**：僕は「具体」を大切に算数・数学の授業を行いたいと、小学校で実習をしたのですが、僕の思う「具体」にあてはめるように授業をしていたことが反省としてあります。その子どもが「具体」と感じられるものは何かを考えながら、今後、授業づくりをすすめていきたいです。

**土屋**：私は、引き続き国語におけるICT活用を実践していきたいです。ICTを勉強すればするほど、好きなタイミングで調べたり対話したりする、「個別最適な学び」や「協働的な学び」といった視点も見えてきました。何より子どもが主体となり、夢中になって学習できる可能性を大いに感じています。私も理論を学んだばかりで、実践はまだまだこれからですが、先生方と一緒にICTの実践を積み重ねながら、生徒主体の授業づくりをしていきたいと考えています。

**竹内**：みなさんの話を聞いていて思ったのですが、子どもの思いを感じ、寄り添っていくことが一番大切ということですね。研究所での研修もあとわずかですが、ここで学んだことをこれから発揮していくことが私たちの使命ですね。